

令和3～4年度 施設提案型モデル事業 「最終報告書」

施設名 馬場幼稚園

【取り組みのテーマ】

子ども主体の遊び理解に基づく教育課程の再編を目指して

【2年間の主な取り組み内容】

- (1) 教育課程の作成と作成したねらいが今の子どもの姿と合致しているかの確認
- (2) ねらいを達成するための保育者の援助のあり方の検討
- (3) 園内研修の構築とカリキュラム・マネジメントおよびPDCAサイクルについての理解

講師：虫明淑子（北陸学院大学人間総合学部子ども教育学科教授）

【研究のまとめ】

<研究の成果>

1. 保育者の援助の変化に伴う子どもの育ちの変化

①遊びの環境づくりに対する考え方が変わった

これまでの、遊びの数が多い方が子どもの遊びは豊かになると考え、園庭や保育室に多くの遊びのコーナーをつくっていた。初回の園内研修では講師より、コーナーで子どもがじっくりと遊ぶ姿が見られず転々とする子どもが多い、保育者が遊びを見きれておらず必要な援助を要する場面に気付いていない、子どもの遊びの姿に対する共感が少ないなど指摘を受けた。その際、遊具で子どもを遊ばせることに重きを置いていたこと、保育者はその場の思い付きで遊びを出していたこと、コーナーにあるモノや道具が散らかりっぱなしになりがちでその整理に保育者が追われていたことなど、課題や悩みをありのままに開示、共有した。それが本研究の始まりだった。翌日にはすぐに、園庭にある遊びを保育者が見守れる数に減らす、道具の数を見直す、プラスチックよりも木切れや葉っぱなどの自然素材を遊びに取り入れるなど、改善に取り組んだ。また、子どもの遊びの姿の全体像が把握するために、各クラス（学年）の遊びを1つの環境図に記録するようにした。さらに、園庭やホールでの遊びの環境は様々な年齢の子どもが入り混じり遊ぶ方がよいと考え異年齢で遊ぶ時間をとっていたのを、異年齢では達成されないねらいがあることを理解した上で、同年齢の子ども同士で遊び込める時間を確保することなど行っている。

②保育者の関わり方が変わった

遊びの環境づくりへの考え方が変わったことで、保育者があれこれ動いて回らず、落ち着いて子どもと関わるできるようになった。以前の保育よりも、子どもは遊びの中で何を楽しんでいるのか、どのようなことに挑戦しようとしているのかなどが見取れるようになり、そこで得た気付きや発見を、設定保育に活用しようとすることもある。

③記録の取り方が変わった

日誌はこれまで、その日に行われた行事とその反省を中心に書くことが主だった。講師には、どうせ書くのなら効率的に、明日以降の遊びの環境構成や援助を見直せる書き方にするよう提案された。1年次は、日誌に環境図を書き入れ、遊びの読み取りに重点を置く書き方に変えた。2

年次は環境図を書き入れることに負担を感じる保育者もあったので環境図のない週日案形式に戻したが、図は入れなくても、遊びの読み取りに対する援助の実際など、以前とは違う書き方に変わっている。また、ねらいの意味に気付き、複数担任のどちらもが週日案に立てたねらいに基づき実践するようになった。日誌やエピソード記録の書き方もねらいに視点を置いて書くように変わった。遊びのねらいを行事の指導につなげる努力が見られることもある。

④活動・行事の見直し

遊びを中心とした保育を目指すようになると、今までの活動や行事に対する疑問が出てきた。年長組の活動では、季節ごとに行う森の幼稚園に加え、英語教室・体育教室・スイミングに追われることが多く、じっくり遊ぶ時間が取れない週もあった。そこで、遊び中心の保育の重要性を再確認したことを機に、英語教室を廃止、体育教室・スイミングの回数を減らし、子どもが自由に遊ぶ時間を確保することにした。保護者に対しては、1年次研究終了時、以前の園では見られない遊びが展開されるようになった3月の懇談会で趣旨を伝えたところ、子どもの遊びの充実のためならば、と思いの外、反対意見が出ることもなく、了承された。

次に、行事については、これまでほとんどの行事が全て保育者による企画で、保育者は大変だと感じつつも時間に追われながらやってきていた。しかし、子どもが何に興味をもっているのかに目を向けられるようになったことで、それをヒントに行事をつくるようになった。例えば、夏の集いは、簡素ながらも子どもメインで遊びのコーナーをつくるようにした。また、収穫感謝の集いでは子どもができる役割を増やし、準備段階から子どもと一緒に進めるようにした。さらに、子どもを楽しませるだけになっていたハロウィンなどの行事は廃止することにした。このような取り組みにより、保育者は以前に比べ、行事に対する負担感が減ってきた。また、ねらいに基づく遊びや活動内容は、全員が同じ内容を達成しなければならないものだと考えていたが、同じねらいであっても個々の子どもの興味や発達に応じて、内容は違ってよいという考え方に変わった。例えば、製作物ではこれまで全員が同じ素材を使い、同じ物をつくるのがほとんどだったが、子どもの興味関心に合わせ素材や方法を工夫し、その子どもに合わせた形でねらいを達成すればよいと、保育者の意識が変わり始めている。

⑤保育のちぐはぐさの解消

振り返れば、今までは、園内でねらいの重要性を意識したことはなく、共有することもなかった。そのため、各学年担任は、ねらいの意識どころかねらいのない計画を勝手に立て、思うままに保育を行っていく面があった。その結果、例えば、4歳児が5歳児よりも高い活動内容になることもしばしば起きていた。3歳児から5歳児までの発達を連続的に見通した教育課程を作成し直し、カリキュラム・マネジメントやPDCAサイクルについての理解を深められたことで、保育者の嗜好や力量、思いつきで左右されるような保育のちぐはぐさからの解消が進んだ。

2. その他の成果

①保護者の園の保育理解が進んだ！

クラス懇談会では保護者に対し、各クラスの保育の中で見られる子どもの育ちの姿を、期のねらいに基づき伝えられるようになった。また、教育課程には期ごとにねらいがあることや遊びが学びにつながる道筋があるなど伝えることで、幼稚園教育への理解を促す機会にもなっている。ねらいに沿って保育を伝える方法は、保育者も自分のしている保育を伝えやすく、保護者にとっても理解しやすいようである。クラス懇談会や保護者主催研修会などへの参加率が以前よりも増え、園に寄せられる保護者から感想も目に見えて増えている。

②入園希望が増えた！

これまでは入園希望者を増やすために、言わば、保護者に気に入られるような保育をしてきていたのだが、それに反し、入園希望者は減少傾向にあった。このような状況で、保護者に喜ばれる英語をやめることに不安はあったが、この機に取りやめた。しかし、園見学に来た保護者に、実際の子どもの遊びを見せ、園の目指す保育についてねらいに沿って説明していると、見学に来たその日にそのまま入園する希望が増えるだけでなく、3歳以上の転園希望者が増えている。保護者ではなく子どものための保育に変えたことで園児数が増加していることに驚いている。

3. 課題

①教育課程、道半ば

今までの教育課程は、文献等を参考に、文言を引っ張るように作成してきたが、今となつては、そのような作業が園の保育にとって何の意味もなかったことがよく分かる。3歳から5歳児までの3年間の教育課程の期のねらいを設定することは、言葉1つ1つに引っ掛かりを覚えつつ作業することになるので難しく、なかなか完成に至らない。しかし、できるだけ自分たちの言葉を使って、誰が読んでもわかりやすく、新しく就職した先生が読んでもわかる教育課程を今、時間をかけても作ろうとしている。現在、5領域の視点を取り入れて作成しているが言葉に悩むことが多く、道半ばである。計画と実践をつなげることを楽しみながら、完成に向けたい。

②教職員の共通理解

保育者の保育を見る視点は以前と比べ変わってきているものの全員がそうかと言うとまだまだである。園の保育者全体が成長を促すためには、教師研修会等の機会を積極的に利用し、園内研修や協議で得た学びの視点を共有することが重要である。幼稚園と比較し認定こども園では、全員が集まって一斉に研修を実施することは難しいが、今回対象の5歳児保育者が、公開保育や協議で学んだことを全体に共有する形の研修の形も十分に効果がある。このような小さな研修のメリットは、一人一人の保育者が自分の保育に置き換えて考えやすい。今後も、園のすべての保育者が自身の保育を見直す機会になることを願い、継続していきたい。

③キリスト教保育としての視点

当園は、キリスト教保育を基として保育を行っているが、キリスト教保育の視点を教育課程にどのように盛り込んでいくかは課題である。

4. まとめ

本研究への取り組みによって、本園は、初めて、カリキュラム・マネジメントやPDCAサイクルの意味と重要性が分かってきた。今までのねらいは、保育者が困っていることを解消するために立てたねらいであったことを痛感する。今回、遊びに特化したねらいを立て、遊びの評価に専念したことにより、少しずつ子どもの姿の本質を見取れるようになった。第3回公開保育の際に、ねらいと子どもの姿がしっかりと重なった時の感動は忘れられない。その視点を他の学年でも実現できるよう、来年度からも引き続き園内研修を行っていく。

教育課程作成の取り組みは遅々とした歩みしかできていないが、講師より「焦ってつくるものではなく、5年かかると考えたらい」「保育をして行く中で、埋まらなかったところにぴったりと当てはまる言葉が出てくることもある」などのアドバイスを受け、励まされる。また、教育課程の完成のためには、何より、日々の保育を丁寧に行い、子どもの姿を記録していくことが重要だということを実感する。本園は、幼保連携型認定こども園に移行した。今回の教育課程の作成手順を参考に、全体的な計画の作成に臨むことは今後の課題である。

